

か小石川植物園に唯一株あつたハギで今は枯死してない。昭和二年發行拙著日鮮萩類の研究に新種として記載した萼片の針狀に尖る種である。昨年伊延敏行氏は阿波名西郡旭丸山で採集し始めて野生地の一つが確められた。

477) ヒメハギの一品で花が最初から緑のものがある。萼は先が白く花瓣は淡緑で先が緑である。宮崎縣南那珂郡吾田の草地に自生して居るのを採つた。セイワヒメハギと命ずる。

478) 伊豆大島のイタヤカヘデは葉型が同じ枝でも種々に變る。葉柄は紅色、葉身は5-7 裂し裂片は披針形で長く尖る。5 裂するものは基が或は丸く或は廣楔形、7 裂するものは基が截形である。夏は緑で秋遅く汚れた帯褐黃色になる。之をナナバケイタヤと新稱する。イタヤカヘデの一型である。

479) サルナシの葉柄と葉身の主脈に鐵銹色の毛の密生するのはサビサルナシの名で朝鮮産として知れて居たが昨年池上義信氏は越後で採集した。日本列島では初めての發見である。

480) ムラサキリウキウの自生は今迄知られて居なかつたが昨年伊延敏行氏は阿波名東郡眉山で發見した。

481) キタゴウアザミ(新種)。宮崎縣南那珂郡北郷村の草地で筆者自身發見採集したものであるがノアザミ群の一種で莖に毛の多い事は オキナアザミの様であり花時に根出葉があり莖葉と共に多數の整つた裂片が後方に反轉して出る。

482) ツクシニガナ(新變種)。ホソバニガナに似て根出葉は匙狀倒卵形、莖葉は幅5 mm 以上基に向ひ細まり無柄である。薩摩、日向、肥後、肥前等にある。ホソバニガナでは葉幅 4 mm である。北村氏の *Iceris Makinoana* は二型を含む一は眞のホソバニガナであり一は其に似て葉脚が少しく莖を抱くものである。本島と四國とにある。アヒニガナ(中間型のニガナの意)と假稱して置く。

483) ハンクワイサウを *Ligularia* 屬に入れるなら *Ligularia palmatifida* (S. & Z.) なる新組合せが必要である。

484) サハヲグルマに全然毛がないか花莖の先に僅かに毛のあるものが宮崎縣にある此をアオサハヲグルマといふ。

○ボゴル植物園産の發光菌類 (佐 藤 正 己) M. M. SATO: Notes on the luminous fungi found in the Botanical Gardens, Buitenzorg.

小林義雄博士が最近發表された論文*を拜見すると、ボゴル植物園で 1902 年 4 月に Prof. Volkens が採集した標本によつて Hennings が記載した *Mycena illuminans* P. Henn. が、パラオ島特産の *M. bambusa* Kawam. と共に *M. cyanophos* Berk. et

* 小林義雄: 發光菌の日本に於ける新分布及びその近縁種に就いて、國立科學博物館研究報告 26:13-19(1949)

Curt. の異名とし整理されている。

専門外の筆者がこれに蛇足を附することは失禮なことであるが、原産地の植物園で自ら観察して來たと云う點でお許を願いたい。

1945 年の 2 月頃と思うが、昭南博物館 (Raffles Museum, Singapore) の羽根田彌太博士が發光菌の採集に來園されたので、折柄の暗夜を利用して腊葉館長の金平亮三先生と筆者と 3 人で園内を歩き廻つた。そして傘の光るもの 3 種、孢子だけが光るもの 1 種。菌糸の光るもの 1 種を得た。この中に問題の *M. illuminans* があつたことは勿論である。

原記載によると産地は Java, Hort. ad truncos *Calami* とあるが、これは恐らく植物園本部 (舊園長官舎) から通用門に出る大道の曲り角にあたる第 12 區の C 小區にある籐 (*Calamus* spp.) を指すもので、40 餘年後の當時でも Prof. Volkens が見たと同様の姿で残つていたものと思はれる。この小區は籐のひどいジャングルなので園丁も落葉拾いに餘り入らぬので腐植質に富み、發光茸には恰好の生育地である。原記載の前文を見ると、まるでクリスマスツリーにロウソクをともした様だとあるが、正にその通りで、地際に最も多く生ずるが、高さ 1 米位までも疎に生ずる。その光はやや綠色を帯び、傘の徑が 1 糎内外なので、適當な間隔を保つて 2 個だけある場合には丁度虎か豹の様な猛獸が物蔭にひそんで獲物をねらつてゐるのかと、思わずギョッとする位である。植物園勤務の若い日本人職員もある夜遅く此處を通りかかつた時ギョッとして思わず立止つたが、さつぱり動く氣配もなく、だんだん落着いて見ると同じ様に光るものがあちこちにあるので、さてはこれが筆者の語つた發光茸かと考えつき、胸をなで下したと翌朝出勤早々に筆者に報告したことがあつた。

この發光茸は傘の表面に多量の粘質物を分泌しているので、筆者はネバリヤコウタケ (粘り夜光茸) の和名を與えた。そして更に搜し廻つた結果、半ば腐朽した種類不明の潤葉樹で作つた杭にも發生しているのを採集した。

羽根田博士は採集品を昭南に持歸り、昭南植物園 (Botanic Gardens, Singapore) に軟禁されて居た前副園長の Dr. Corner の同定の結果を報告して下さつた。それによると *M. illuminans* と *M. bambusa* は同一種であると云うことで、この點は小林博士の御意見とよく一致する。

ネバリヤコウタケや其他の發光茸、ジャバ海産のイカや魚類から分離した發光細菌類、バンダ海に多い發光器を持つ魚類、ジャワに普通に産する光るヤスデの類や昆蟲の幼蟲など、光る生物に関する筆者の知見をまとめた半通俗的な論文をジャワ新聞発行の月刊雜誌新ジャワの 1945 年 8 月號に出したが、校了になつたままで終戦のため出版されずに終つた。死兒の齡を數えるに似ているが、小林博士の論文を見て思出した事を少し書かして載いた次第である。